

拡大された自己 : Adam Bedeにおける他者との連帯

谷, 綾子
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790335>

出版情報 : 九大英文学. 49, pp.1-16, 2007-03-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



拡大された自己 —*Adam Bede*における他者との連帯

谷 綾子

序

George Eliot は道徳的な作家として有名である。¹彼女は己の作家活動を「人生における一連の実験活動」²として捉えていた。Eliot は、性格も考え方もそれぞれ異なる登場人物を小説という名の舞台の上におき、彼らがどのような人生を歩むかという観察を通して、どのような生き方が「より良きもの」³を生み出しうるのか模索しようとしていたのである。つまり、道徳こそが George Eliot を作家活動に駆り立てた原動力そのものであったのだ。

1859年に出版された George Eliot 初の長編小説 *Adam Bede* は文壇で高く評価され、この作品を機に Eliot は一流の作家として認められるようになった。*Adam Bede* は牧歌的な農村 Hayslope を舞台に、個性豊かな4人の若い男女が中心となって織りなす田園小説である。実直で敬虔な主人公の Adam、自分のことしか考えない美少女 Hetty、無私の愛で神に仕えるメソジストの Dinah、そして優しいが優柔不断な Arthur—この4人が絡み合う糸のように互いに働きかけながら Hetty の破滅という1つのカタルストロフィーに向かって集結していくのである。彼らはそれぞれ性格に違いがあるものの、迎えた結末については大まかに二通りに分かれる。Adam や Dinah が実りある幸福の恩恵に与る一方、Arthur と Hetty は悲劇的な結末を迎えることになるのである。後者の悲劇は主に彼らの利己的な性格に起因するものだと考えられる。本稿ではこの2人の、とりわけ Arthur の人物像を中心に分

析していきたい。利己的な人間の破滅に迫ることは、却って Eliot の考える道徳的な生き方の本質を把握する手がかりになると考えられるからである。

I Egoism

Arthur と Hetty に共通する性質は、自己の欲望に忠実なエゴイストであるという点である。特に Hetty の利己主義は徹底されていて、彼女の興味や関心の全ては自己に向けられている。彼女は自分以外のものに愛情を抱くことができず、自分を育ててくれた叔父夫婦に対しても何ら関心を持たない。George R. Creeger が Hetty の Arthur への愛は自己愛の反映のようなものだと言主張するように、彼女が Arthur を愛した時ですら、彼女の愛情の大部分は Arthur が彼女の欲望（贅沢な生活をしたという欲望）を満たすであろうという思い込みに依存している。⁴ 自分しか愛せない Hetty はまさにエゴイストの象徴的存在だといえるだろう。一方同じエゴイストでも Arthur の描写は Hetty のものとは大分違う。利己的ではあるものの Arthur は決して愛のない冷血漢ではない。むしろ彼は進んで土地改良を志す善良な紳士として描かれているのだ。だが結婚するつもりがないにも拘らず Hetty に愛の言葉をささやき、キスを交わし、挙句彼女を妊娠させた Arthur の行為は間違いなく卑劣な性質のものである。良心も優しさも兼ね備えた Arthur が他者を破滅に追いやる－ここに利己主義の恐ろしさがあるのである。

Irwine 牧師は、Arthur の正直さ、善意への誇りや周囲からの尊敬が、愚かな誘惑への抑制になるだろうと考えていた。そして Arthur 自身もそう信じていた。周囲の尊敬を失うのは自分にとって耐えられないことであり、この誇りが評判を下げるような卑劣な振舞いから自分を遠ざけてくれるだろうと Arthur は信じていたのである。だが彼の善意や誇りの多くは利己的な欲望に基づいている。

[. .] a young man like Arthur, with a fine constitution and fine spirits, thinking well of himself, believing that others think

well of him, and having a very ardent intention to give them more and more reason for that good opinion, [. . .].⁵

彼が小作人達に対して善行を施そうとするのは、人の役に立ちたいという純粋な好意からではなく小作人達の尊敬を得たいがためであった。人から尊敬されることで自尊心を満足させるためであったのだ。彼の善意の根底にはいつも人から尊敬されたいという自己中心的な性質が潜んでいたのである。良心や優しさが利己的な性質に混ざり合っているため、その利己主義は Hetty に比べると徹底されていないものの、Arthur もまたエゴイスト以外の何ものでもないのだ。そして利己主義が根底にある善意や誇りは欲望を抑える真の抑制にはなりえない。

人気のない森の中で初めて Hetty と 2 人きりになった Arthur は彼女の魅力の強さに驚きと危機感を覚える。Hetty を愛し始めていることに気づいた Arthur はこの衝動から身を守るために彼女に会うまいと決心する。しかしその直後彼は Hetty に会いたいという衝動を「ただ彼女の気持ちから誤った印象を取り除くため」(133)という善意の目的にすりかえている。Hetty に会いたいという邪な欲求を善意の目的にすりかえることで彼は良心のとがめを感じることなく自分の衝動に忠実になることができたのである。また、自分は善良であって不名誉な振舞いをするはずがないという誇りが衝動の対象である Hetty に近づいてもよいという根拠として機能している。つまり善意や誇りが彼の衝動を抑えるどころか、逆に利己的な欲望を満たすための手段となっているのだ。Arthur は自分の不始末を「環境の組み合わせ」(71)の結果と捉え、そこに自分の意図はなかったものと考えているのだが、彼の罪は実は自身の利己的な性質によるところが大きい。なぜなら彼は Hetty に対する自分の衝動の強さを自覚していたにもかかわらず、善意の目的にかこつけて結局衝動のままに行動しているからである。

また、Adam から Hetty との関係を追及されたとき、「正直者の Arthur」(300)は Adam を欺くことに唯一の希望を見出している。このような Arthur の心理状態を作者は次のように分析している。

Our deeds determine us, as much as we determine our deeds; [. .] There is a terrible coercion in our deeds which may first turn the honest man into a deceiver, and then reconcile himself to the change; for this reason – that the second wrong presents itself to him in the guise of the only practical right. [. .] No man can escape this vitiating effect of an offence against his own sentiment of right, and the effect was the stronger in Arthur because of that very need of self-respect which, while his conscience was still at ease, was one of his best safeguards. Self-accusation was too painful to him – he could not face it. (315)

つまり罪への衝動に対する抑制として機能するはずだった誇りが Arthur に更なる卑劣な行いをさせているのである。なぜなら Arthur にとっての実行可能な善とは彼の誇りを傷つけない行為であるからだ。しかし実際に罪を犯した以上 Adam に自分の罪を正直に告白することは、Arthur にとって善良な紳士としての体面を傷つける実行不可能な善に他ならない。自分の誇りを傷つけないためには自分の罪から眼をそらし、そして他人の眼を欺き続けることしかできない。彼が今まで通り「善良」でありつづけるために嘘という更なる卑劣な行為が彼に強制されるのである。このように誇りを守ろうとする利己主義が彼の根底にある限り、善と悪は相互に依存する関係を保つ。善良であろうとすることが逆に更なる悪行を招く理由になるのである。そしてこの悪循環を断ち切れないでいるうちに本来正直だった Arthur は本物の嘘つきへと変貌をとげてしまったのだ。

このように Arthur の善意や誇りは衝動への抑制になるどころか、衝動を後押しする推進力としてその力を発揮している。というのも、彼の善意や誇りの根底にあるものはこの衝動の性質と同じもの一つまりエゴイズムだからである。「彼にとって親切は悪い習慣と同じくらい簡単なものであった」(312)とあるように、彼の親切と悪い習慣は表面上は正反対のものであっても、根

底にある動機は同じものなのだ。親切が周囲の尊敬を得るための手段であれば、悪い習慣は自分の欲望を満足させるための手段である。それは両方とも結局彼のエゴを満たす行為であり、善意と衝動が彼のエゴを満足させるという同じ目的の元に相互に依存しあっているのである。

この利己主義の中に本作品の悲劇があるように思われる。Eliot は決してエゴそのものを否定していたわけではない。しかしエゴを最優先させる利己主義には、最終的に却ってそのエゴを、つまり自分自身を滅ぼしてしまうという可能性が潜んでいるのである。George Eliot が多大な影響を受けたとされるスピノザ⁶は事実をあるがままに知覚する能力を「理性」と捉え⁷、理性によって自らの激情を完全に認識することができれば、その激情を克服できると考えた。⁸ところが利己的な人間はエゴという歪んだ主観的認識でしか物事を把握できないために激情を克服する理性的認識を得ることができないのである。Arthur が過ちを犯した最大の原因は、彼の利己的な衝動そのものよりむしろその衝動や欲求を善意とすりかえることで自分を騙したことにある。Arthur は Hetty に会いたいという欲求を「彼女に親切に振舞いたいだけ」という善意に置き換えることで自分に嘘をついた。自分の激情を見誤りそれを善意と都合よく解釈したために、Arthur は利己的な衝動を克服できなかったのである。41章で Adam は Arthur への押さえ切れない復讐心をつのらせるのだが、この時 Irwine 牧師が Adam にした忠告は、この利己主義の危険性を端的に表現している。

You may tell me that you meditate no fatal act of vengeance: but the feeling in your mind is what gives birth to such actions, and as long as you indulge it, as long as you do not see that to fix your mind on Arthur's punishment is revenge, and not justice, you are in danger of being led on to the commission of some great wrong. (425)

Irwine 氏は Adam が個人的な憎悪を正義にすりかえていることを指摘する。

憎悪が正義という言葉を生み出しているのである。そしてその正義という名の隠れ蓑は Adam の利己的な欲望、つまり個人的な復讐心を満足させる道具になりかねない。なぜならその正義は真の正義ではなく衝動の仮の姿だからである。理性的認識に基づいて衝動を正しく認めることから衝動の抑制は始まるのである。

II 共同体の一部としての個

では理性に基づいた正しい自己認識とはどのようにして得られるものなのだろうか。その答えの鍵は Dinah の中にある。なぜなら彼女は本作品中ただ 1 人ほとんどエゴを持たない人物として描かれているからである。彼女のあり方を追及することは、ゆがんだ自己認識から脱出するための手がかりとなるだろう。

Dinah は自分自身のための望みを一切持たず、神の被造物である人間の悲しみや喜びの中に生きることによって自己の平安や喜びを見出している(509)。つまり彼女は他者との関係の中にのみ生き、その他者との関係を通して自己を認識しているのである。そんな彼女は辛口の Poyser 夫人をして「降りたての雪のようだ」(513)と言わせるほどに利己的な誘惑や衝動とは無縁の存在である。他者との関係に基づいたこの自己認識はエゴに基づいた自己認識とは違って自己欺瞞を生み出さない。自分の行為を他者の目を通して把握するからである。Arthur は「自分は過ちを犯してもその責任はきちんと自分 1 人で背負っている」(123)と自負しているが、他者を考慮に入れないこの考えは利己主義に起因する例の自己欺瞞の 1 つであって、実際は Irwine 牧師が言うように「罰は 1 人だけでは背負えない。人と人とは空気のようにつながっていて、災いは罪を犯した当人だけではなく周囲の人々までつながっていく」(425)のである。Arthur が「些細なこと」(300)と称して犯した過ちは実際には当の本人だけではなく Hetty やその家族、そして婚約者の Adam を苦しめ、Hayslope の教区全体に大きな波紋を呼び起こした。人は独立した個人であると同時に他者との関係から成る広い社会の一部でもあるのだから、自分の

行為が他者にひいては社会に影響を与えずにすむということはないのである。巻き込まれるだろう他者の目を通して自分の行為をみることができれば、おのずと主観的な自己欺瞞は抑えられるはずである。Arthur は Adam が Hetty を愛しているという事実を知ったとき初めて己の行為の罪深さを認識する。その時の様子を著者は次のように描写している。

The discovery that Adam loved Hetty, was a shock which made him for the moment see himself in the light of Adam's indignation, and regard Adam's suffering as not merely a consequence, but an element of his error. [. . .] All screening self-excuse, which rarely falls quite away while others respect us, forsook him for an instant, and he stood face to face with the first great irrevocable evil he had ever committed. (301-302)

Adam の立場から己の行為を眺めたときにはじめて、Arthur は“screening self-excuse”を通すことなく己の過ちに直面したのである。視点を自己から他者に移したときに初めて理性的認識に到達するのである。また、自分の行為が引き起こす他者への被害やその苦しみを思うことは利己的な衝動を抑える外部の力にもなる。理性的な自己認識は他者との関係に基づいているがゆえに、自分とつながる他者がそのまま外部の抑制力となるのである。そしてこの外部の抑制力こそ利己的な衝動を克服する真の力になるのだ。

この抑制力の効果は *The Mill on the Floss* において詳しく言及されている。Maggie は Stephen と駆け落ちしかけるが、自分の行為がどれだけ肉親や Lucy、そして Philip を苦しめるかを考えて途中で引き返す。彼女と絆で結ばれた人々の苦しみは彼女自身の苦しみでもあったのだ。他者との関係に起因する抑制力は次のような言葉で語られている。

Philip [. . .] had now [. . .] become a sort of outward conscience to her, that she might fly to rescue and strength. [. . .] the fact that in him the appeal was more strongly to her pity and womanly devotedness than to her vanity or other egoistic excitability of her nature – seemed now to make a sort of sacred place, a sanctuary where she could find refuge from an alluring influence which the best part of herself must resist, [. . .].⁹

子供の頃から培ってきた Philip との絆の中に Maggie は外の良心、つまり外の自制心を見出しているのである。自分とつながる他者を強く意識する時、その他者は自己の良心や自制心の反映となり、衝動を抑える外の抑制力として機能するのである。そしてこの外の抑制力が Maggie の利己心を抑えたのだ。Arthur にもきちんと良心があったが「自分は過ちを犯してもその責任はきちんと自分 1 人で背負っている」などと言っていることから分かるようにエゴを通した歪んだ自己認識の中にいたため、他者とのつながりを意識できず外の良心を見出すことができなかったのである。いや、正確にいうと、外の良心を見出そうとして失敗したのである。

善意の目的に反して誘惑に屈してしまった Arthur は自分の自制心に自信がなくなり、Irvine 牧師に告白することで自分の誘惑をはねのける手助けをしてもらおうと決意する。Arthur は Irvine 牧師に外部の抑制力を求めたのである。しかしいざ話す段階に来ると、Arthur は Irvine 氏から優柔不断と低く評価されることを怖れて結局告白の機会を失ってしまう。そうして、「しがみつけたかもしれない希望というロープは流れ去ってしまい、彼は自分の遊泳力に頼らなければならなくなった」(173)のである。彼のプライドが他者から得られる助けを締め出してしまったのだ。時には他人に依存しない強さとして表れることもあるのだが、エゴの産物であるプライドには基本的には排他的な性質があり、他人からの助けや慰めを除外してしまう。プライドが他者から孤立してしまう大きな原因となるのだ。そして他者から孤立するこ

とは外部の助けや抑制力をも除外することを意味している。外部の抑制力は他者との関係が基盤にあるからである。

George Eliot はエゴイズムやそのプライドが招く孤立化に人間の悲劇の本質を見ている。以前にも述べたが、人は独立した個人であると同時に他者との関係から成る広い社会の一部でもあるのである。Adam が「我々は鳥のように生まれ育った巣を離れ、親戚の顔も忘れて自由に飛び回るわけにはいかない」(165) と言うように、人は決して動物のように自由には生きられない。人は他者や故郷、そして過去との密接な関わりの中で生きており、そのつながりなしでは個としての自己も決して幸福になることはないのである。このことを Poyser 氏は次のような言葉で表現している。

[. . .]but I should be loath to leave th' old place, and the parish where I was bred and born, and father afore me. We should leave our roots behind us, I doubt, and niver thrive again.' (349)

故郷とは個人にとって単なる場所ではない。故郷は個人の根(roots)ともいえる存在であって、根がなくてはその先端の実ともいえる個人も決して栄えることはないのである。Eliot の内縁の夫 George Henry Lewes は人間を動物界と社会の有機体との共同の産物と捉え、人の魂には2つの根があるとした。¹⁰Poyser 氏が Hayslope を自身の根と表現しているように社会は一つの大きな木(生命体)に喩えられており、その木の实ともいえる個人はその根を切り離されては栄えることができないのだ。Arthur はプライド故に外部の抑制力を Irwine 牧師に求めることができず、Hetty もまたプライド故に旅の途中で Dinah に助けを求めることができなかった。プライドが他者の力を排除したのである。そしてこの孤立こそが彼らの破滅を招いたのだ。他者とのひいては社会とのつながりに依存するとき、大きな生命体である社会はその果実ともいえる個人に個を超える大きな力を受けるのだが、他者とのつながりを拒否するとき個人は他者との関係から成り立つ社会にとって異物でしかない。

そして異物は排除される運命にある。このことは Irwine 氏の後任の牧師 Ryde 氏が示す例によって証明されている。実質的には何の役にも立たない教義を人々に押し付け周囲を弾圧しようとした Ryde 氏は「下剤」(183)に喩えられ人を悩ませはしたけど、結局人を変えることはできなかつたとされる。彼は熱心に宗教活動に取り組んだが、人々は次第に教会から遠ざかりついに Ryde 氏を軽蔑するようになった。周囲と調和しない彼は下剤のように異物として社会から排除される存在なのである。それとは対照的に「どんなに宗教理念に調和していなかったとしても平和な景色とは調和している」(71)と描写される Irwine 牧師は「おいしい食べ物」(183)に喩えられ何も考えなくて食べても体に良いものだと評される。彼は教区民全ての愛と尊敬を獲得した。周囲と調和する彼はおいしい食べ物のように体(社会という体)に合う存在として社会から受け入れられたのである。Hetty や Arthur は社会の規範を破り周囲の力を排除することで自らを異物としてしまった。異物となった彼らは2人とも Hayslope から追放されるところで社会という生命体から切り離されてしまったのである。他者の力を締め出し自らを孤独に陥れる利己主義には却って自己を損ねる悲劇の火種が内包されているのである。

III Sympathy

前章で述べたように、他者とのつながりを受け入れることは個人の幸せのための必要不可欠な条件である。しかし、他者とのつながりを受け入れることは決して楽なことではない。*Middlemarch*において「人間はみな道徳的に愚鈍に生まれついていて、この世界は我々のこの上なく貴重な自己を養ってくれる乳房だと考える」¹¹とコメントされるように、人類は基本的には皆エゴイストだからである。ではどうすれば利己主義を脱することができるのだろうか。どうすれば他者とのつながりを受け入れることができるのだろうか。本章では他者との関係に生きる Dinah を追求することでその答えを見出していきたい。

本作品中、ひととき異彩を放つ Dinah は他の登場人物と一線を画している

とはいうものの決して他者から孤立した存在ではない。むしろ彼女は他者との関係性の中でしか生きていないからこそ異彩を放っているといえる。そして彼女は他者とのつながりをシンパシーの中に見出している。Dinah は夫の死にうちひしがれた Lisbeth に次のように話し掛ける。

God didn't send me to you to make light of your sorrow, but to mourn with you, if you will let me. [. . .] but I should like better to share in your trouble and your labour, and it would seem harder to me if you denied me that. (111)

Lisbeth は Dinah の説得で、今までいくら Seth に勧められても片付けようとはしなかった居間を掃除することに同意する。そして愚痴と涙ばかりこぼしていた Lisbeth は Dinah が側にいることでおとなしくなり、Dinah の中に慰めを見出すのだ。上記の抜粋から分かるように Dinah は他者の苦難や労働を減らそうとしているのではなく、それらを共有しようとしている。つまり彼女はシンパシーによって他者とのつながりを持とうとしているのだ。そして彼女のそうした姿勢が Lisbeth に安らぎを与えたのである。彼女は他者とのつながりの中で生きるから神秘的なのであって、もしメソジストを特権視して他宗派を締め出すことが彼女の宗教であったなら、彼女が人々の心に影響を与えたり、慰めをもたらしたりすることはできなかったであろう。人々は Dinah と苦難を共有することによって彼女が示そうとしている神の存在やその神秘性を感じることができるのである。シンパシーが人の心と心をつなぐ鍵なのである。そしてこのシンパシーは「最良の洞察と最上の愛全てを包括する」(488)ただ1つのものとされている。

最高の洞察力であるシンパシーは *Scenes of Clerical Life* において「自分自身の過去を新しい形で繰り返すこと」¹² だと定義されている。つまりシンパシーを得るには自分自身がつらい過去を経験する必要があるのである。このことを著者は次のように表現している。

It is our habit to say that while the lower nature can never understand the higher, the higher nature commands a complete view of the lower. But I think the higher nature has to learn this comprehension, as we learn the art of vision, by a good deal of hard experience, often with bruises and gashes incurred in taking things up by the wrong end, and fancying our space wider than it is. (159)

ここで著者は「性質の優れた者は劣った人を理解すると言われるが、優れた人はこの洞察力を痛手を伴う自分自身の過ちから学ばなくてはならない」と主張している。自分自身が過ちを犯すことではじめて、過ちを犯した他者へのシンパシーを得ることができるのだ。ところが性質の優れた人というのは概して過ちを犯さないものである。そのような性質の優れた人物はどのようにして洞察力を学ぶうるのであろうか。

本作品の主人公 Adam Bede は賢く自制心の優れた人物として描かれているが、同時にプライドの高い人間であることも度々指摘されている。彼のプライドは主に他人に依存しない強さとして表れるのだが、その分他人の弱さや過ちに厳しすぎるきらいがある。彼は父親が死んだとき初めて自分の厳しさを反省する。Adam は酒に溺れて働かなくなった父親の分まで一家の苦労を一身に引き受けてきたが、彼はわき目も振らずに働くことで父親の弱さに背を向けてきたのだ。彼の心は人の弱さや過ちを許さず、それらを締め出してしまう。彼のプライドが人の弱さや過ちを受け付けないのである。彼が意志や自制心の強い人物であることは確かだ。しかし彼の強さは自己完結した強さであって、その強さは個人の限界を超えることはない。なぜなら彼は他者とのつながりを受け入れることができないからである、他者とのつながりを受け入れるということは他者の弱さや過ちまでも受け止めることを意味している。だからこそ他者とのつながりを受け入れるのは難しいのである。だがそれができなければ他者から得られる力も受けることはできない。優れた性質の持ち主である Adam は決して Arthur のような愚かな過ちを犯した

りはしない。痛手を伴う過ちを犯さない彼には過ちを犯した他者の気持ちに共感(sympathy)を覚えることもなければ、過ちを犯すような弱さを受け入れる気にもならなかったのである。このような彼がシンパシーを学ぶにはどうすればいいのだろうか。著者はこのことについて次のような見解を述べている。

[. . .] he [Adam] had too little fellow-feeling with the weakness that errs in spite of foreseen consequence. [. . .] And there is but one way in which a strong determined soul can learn it —by getting his heart-strings bound round the weak and erring, so that he must share not only the outward consequence of their error, but their inward suffering. (210)

心の琴線を弱いものや過ちを犯したものにはりめぐらし、過ちの結果だけではなく内部の葛藤まで共有すること—これが“fellow-feeling”を学ぶ唯一の手段であると著者は主張している。弱者を愛することで、その弱者の苦しみを共有することができるのだ。なぜなら *Daniel Deronda* において Deronda の母が主張するように「愛とは相手を拡大された自己だと思うこと」¹³ であるからだ。だから弱者を愛するとき、その弱者は拡大された自分自身となる。そしてその弱者が過ちを犯したとき、その苦しみはそのまま自分自身の苦しみにつながるのである。

さて Adam は基本的に誰に対しても厳しかったが Hetty に対してだけは例外であった。彼の心の琴線は Hetty のまわりに張り巡らされていたのである。Irwine 牧師はこれを彼の弱さと考えていたが(420)、視点を変えればこれは彼の心の柔らかい一面でもあるのだ。最愛の Hetty が嬰兒殺しの罪に問われたとき、彼は大いに苦しむ。彼は裏切られた自分自身のためではなく彼女のために苦しんだのである。誰も彼女に同情するものがないことに、身内の Poyser 一家ですら彼女を見捨てたことに彼は心がえぐられるように感じたのだ。彼の苦しみは Hetty が有罪であることを知ったときに最高潮を迎える。

彼女が罪を犯したと知ること、彼自身が過ちとそれに伴う痛みを疑似体験したのである。そして Adam は彼女の苦悩を共有することによって他者の弱さや痛みを受け入れることができるようになる。彼は嫉妬や復讐心をも乗り越えて Arthur の過ちをついに許した。彼が Arthur への憎しみを乗り越えたのは「彼自身の痛みが Arthur への共感と交じり合うのを感じた」(471)とあるように Hetty を思う共通の苦悩が Adam と Arthur を結び付けたからである。シンパシーが彼と Arthur とを結びつけたのだ。

結

他者へのシンパシーを学んだ Adam はより道徳的な人間へと成長する。彼はもう二度と誰かに辛くあたろうとはしなくなった。そして自分の弟や母に対してはより一層優しい気持ちで接するようになったのだ。彼のこの変化は次のように語られている。

He did not know that the power of loving was all the while gaining new force within him; that the new sensibilities bought by a deep experience were so many new fibres by which it was possible, nay, necessary to him, that his nature should intertwine with another. (489)

他者を受け入れることを学んだ Adam は人の弱さや悲しみを敏感に感じとる豊かな感受性を得たのである。より愛情豊かな男性に生まれ変わった Adam はその愛情の対象となる誰かを知らず知らずのうちに求めている。そしてこの彼の欲求がやがて Dinah への愛という具体的な形をとるようになったのである。著者は Adam の Dinah への愛は「深い悲しみを知ることによって生まれたより充実した人生の結果」であると述べている。Dinah への愛は Hetty への愛よりも「もっと立派で尊い」(530)ものであった。なぜなら彼の愛情は多分に尊敬の念が含まれていたからだ。*Scenes of Clerical Life*において、人が

善良になるための条件は愛することと尊敬することだと述べられている。¹⁴ 彼は Dinah への気持ちの中にこの愛と尊敬を見出したのだ。そこには以前のプライドの高い彼の面影はない。Dinah との結婚は Adam にとってつらい苦悩がまいた種の「収穫」(534)だったのである。そして Adam は Dinah との結びつきの中に「新しい力」(530)を見出す。彼の力はもはや自己完結の類の力ではない。彼は Dinah と結びついたことで利己主義を超えることができた。Maggie が Philip に自己の良心や自制心の反映を見出し、それが誘惑の抑制力となったように、情愛と尊敬で結ばれた他者はもう 1 つの自分の力になるのである。

Adam は他者と、Dinah と結びついたことで、社会に根付く共同体の一部としての自己を確立し、Dinah の中に自分自身の外側にあるもう 1 つの力 (added strength, 530) を見出した。シンパシーによって他者と結びつき、共同体の一部としての自己を確立する—これが George Eliot の提唱する道徳的なあり方ではないだろうか。

註

1. David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation* (1934; London: Constable, 1943) 305.
2. Gordon S. Haight ed., *The George Eliot Letters*, vol.6 (New Haven: Yale University Press, 1954-6) 216.
3. *Letters*, 216.
4. George R. Creeger, "An Interpretation of *Adam Bede*," *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (New York: Prentice Hall, 1970) 97.
5. George Eliot, *Adam Bede*, ed. Stephen Gill (London: Penguin Books, 1985) 439.
以後、本書からの引用は、本文中の括弧内にページ数のみを記す。
6. R. Ashton, *George Eliot* (Oxford: Oxford UP, 1983) 15.

7. スピノザ著、畠中尚志訳『エチカ：倫理学』上巻（東京：岩波書店、1982）147
8. 『エチカ：倫理学』下巻 103
9. George Eliot, *The Mill on the Floss*, ed. A.S. Byatt (London: Penguin Books, 2003) 427.
10. George Henry Lewes の研究については、 Bernard J. Paris, “George Eliot’s Religion of Humanity,” *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970) 15-16.を参照。
11. George Eliot, *Middlemarch*, ed. Rosemary Ashton (London: Penguin Books, 1994) 211.
12. George Eliot, *Scenes of Clerical Life*, ed. Jennifer Gribble (London: Penguin Books, 1998) 300.
13. George Eliot, *Daniel Deronda*, ed. F.R.Leavis (New York: Harper & Brothers , 1960). 501
14. *Scenes of Clerical Life*, 265.